

# 三条西家旧蔵本（学習院大学所蔵）『源氏物語』

## 「須磨」巻の書誌解題と翻刻

— 日本大学所蔵三条西家旧蔵本との比較 —（前半）

武藤那賀子

はじめに

学習院大学は、『源氏物語』「須磨」巻（三条西家旧蔵本）を所蔵している「図一」。これは、江戸初期に書写された本であり、折紙綴葉装という装訂である。<sup>〔二〕</sup>折紙綴葉装は、連歌師たちが所持していた本に多くみられ、持ち運びに適したものである。<sup>〔三〕</sup>本帖は、折紙綴葉装の中でも特にサイズが小さく、仮綴の糸も残っており、珍しいものである。また、後表紙見返にある「入道久我殿女房」の書き入れは、三条西家と久我家の関わりを示すものと考えられる。では、本帖は、いわゆる三条西家本源氏物語とどのような関係にあるのだろうか。

本稿では、本帖の書誌を示し、本文と書き入れを翻刻し、日本大学が所蔵する三条西家旧蔵本「須磨」巻<sup>〔三〕</sup>と比較して、本帖の位置づけを行なう所存である。ただし、紙幅の制限があるため、全体のほぼ半分にあたる第三〇丁ウラまでのみを扱うこととする。

### 一．書誌解題

【請求番号】 七二三（B一三）

【装訂】 折紙綴葉装 一帖

【書写年代】 江戸時代初期

【寸法】 縦一三・六cm、横九・八cm

【外題】 後補の子持ち梓題簽（縦九・五cm、横二・五cm。木

版本に使用される梓と同等のもの）に「源氏物語

須磨巻」と墨書。

【表紙】 後補。錆鉄御納戸の地に八つ丁字車（三条西家家

紋）。

【見返】 楮紙。（本文料紙に表紙を直接貼り付けている。）

【本文料紙】 楮紙。

【内題】 なし。ただし、見返しに原表紙と思われる「須磨」

と書かれた紙（縦三・五cm、横一・六cm）が貼られ

ている。〔図二〕

図一 学習院大学所蔵『源氏物語』「須磨」巻 表紙



【紙 数】 全五十七丁（前遊紙・後遊紙なし）。五枚ずつの綴

じが六折。ただし、一折目は、見返しに二丁貼られており、一丁目はほぼ損なわれている。

【字 高】 約一一・五cm。

【半葉行数】 九行。

【和歌表記】 歌は二字下り。一首二行書きで二行目は下がらず、また末尾は地の文に続く。

【書き入れ】 墨・朱墨で異本注記、補入があり、朱墨で合点が入っている。また、後表紙見返しに「入道久我殿女房」と小字で墨書。【図三】

【保存状態】 良。数箇所破れあり。

【蔵書印】 見返の原題箋にかかるようにして「学習院図書館」

の朱正方印陽刻。後見返しに「学習院図書館」の朱楕円印陽刻があり、そこに「昭和24.4.1」とある。

図二 見返し・二丁オモテ



図三 後表紙見返の書き入れ



折紙綴葉装の一折目は、見返に二丁貼られており、一丁目はほぼ損なわれている。また、見返に貼られた「須磨」の紙は、本文料紙と同じ紙であるにもかかわらず、変色している。このことから、この「須磨」の紙片は、表紙をつけるより前の仮綴じの状態のときの原表紙にあたる部分に書かれていたものであり、八つ丁字車紋の現在の表紙をつけるにあたって、変色した原表紙を切り取り、それを現在の見返に貼ったものと思われる。また、現在の表紙をつけて製本したにもかかわらず仮綴じの糸が残っていること、表紙に使用されている料紙は三条西家本諸本に広くみられるものであることなどから、本帖は、他にも多くの本が表紙をつけられる状態の中で、本としての体裁を整えたものであろうといえる。

松尾聡の手によって、学習院大学国語国文学研究室（現日本語日本文学研究室）が、三条西家より本を直接譲り受けたのは、昭和三年一月二七日と昭和二四年三月四日の二度である。<sup>四</sup>後見返しにある朱楯印の「昭和24.1」の記載から、本帖も、昭和二四年三月四日に譲り受けた本のうちの一枚であると考えられる。

## 二. 本文と書き入れの翻刻、および日本大学本との比較

以下では、本帖の第三〇丁ウラまでの翻刻を行ない、日本大学本と比較する。凡例その他は以下の通りである。

### 凡例

- 一. 改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、利用の便を考え、丁数とその表裏、行数を付記した。
- 一. 原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。
- 一. 清濁、句読点も原本のままにした。
- 一. ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。また、消した上で文字を補っている場合は、~~ミセケチ~~にした文字の隣に補った。
- 一. 傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。
- 一. 補入記号のない補入は「—」で示し、補入記号のある補入は「〈 〉」で示した。
- 一. 虫食いなどの影響で見え辛くなったために判読し辛い文字は「〔 〕」で括って示した。
- 一. 問題のある箇所についてはアルファベットを付し、注を各丁ごとに載せておく。
- 一. 朱合点は、／で示した。

日本大学本との比較

学習院本の丁数の下にある丸括弧内に、日本大学本の該当丁数を示した。学習院本の翻刻に一重傍線がある場合は、日本大学本との漢字と仮名の違いを示している。また、二重傍線は文字の違いを示しており、各丁の最後に【異同】の項目を掲げ、「学習院本——日本大学本」となるようにして違いを示した。ただし、送り仮名の有無、踊り字か仮名かの違いについては表記していない。なお、日本大学本の異同箇所の翻刻は、学習院本の凡例と同じである。

1オ（1オ〜1ウ）

- 1 世中いとわつらはしくはしたなきこと
- 2 のみまされはせめてしらすかほにありへて
- 3 もこれよりまさることもやと覚しなりぬ
- 4 かのすまはむかしこそ人のすみかなとも
- 5 ありけれ今はいと里はなれ心すくくてあ
- 6 まの家たにまれになんと聞給えと人し
- 7 けく／＼ひた、けたらんすまひはいとほひなかるへしざりとて都を遠さからんもふる里
- 9 おほつかかなかるへきを人わろくそおほしみた

【異同】 6 え——へ 7 ひ——あ

1ウ（1ウ〜2オ）

- 1 る、よろつのことときしかた行すゑおもひつ、
- 2 け給にかなしきこといとさま／＼なりうき物
- 3 と思ひすてつる世もいまはとすみはなれ
- 4 なんこと、おほすにはいとすてかたき
- 5 事おほかる中にもひめ君の明くれに
- 6 そへては思ひなけき給へるさまの心くる
- 7 しくあはれなるを行めぐりても又
- 8 あひみん〔こと〕をかならすとおほさんにて
- 9 たに猶一二日のほとよそ／＼にありし

a 「、」の上に朱墨で「を」と表記。

b 「こと」の部分、紙の破れによる欠損がある。

c 「り」の上に墨で「か」と表記。なお、この箇所は日本大学本では「か」となっている。

【異同】 4 、——を は——ナシ 7 く——う

2オ（2オ〜2ウ）

- 1 くらすおり／＼たにおほつかなき物に覚え
- 2 女君も心ほそくのみ思ひ給へるをいくとせ
- 3 そのほと、かきりあるみちにもあらず／＼あ
- 4 ふをかきりにへた、りゆかんもさため
- 5 なき世にやかてわかるへき／＼か<sup>a</sup>とてにもや

- 6 といみしく覺え給へは忍ひてもろとも  
 7 にもやおほしよるをりあれとさる心ほそ  
 8 からん海つらの波風より外にたちま  
 9 しる人なからんにかくらうたき御さまにて
- a 「と」は、朱墨で濁点を付される。

【異同】 2 く—う 7 を—お

9 人な—人もな

- 2ウ (2ウ〜3オ)  
 1 引くし給へらんもいとつきなくわか心にも  
 2 中く物思ひのつまなるへきをなと覺し  
 3 かへす(へを)<sup>a</sup>女君はいみしからん道にもをくれ聞え  
 4 すたにあらはとおもむけてうらめしけ  
 5 におほひたりかの花ちるさ<sup>と</sup>にもおはし  
 6 かよふことこそまれなれ心ほそくあはれ  
 7 なる御ありさまをこの御かけにかくれても  
 8 のし給へは覺しなけきたるさまもいとこ  
 9 とはりなり猶さりにてもほのかにみたて

a 補入記号及び「を」は別筆である。なお、日本大学本には

「を」が入っている。

【異同】 4 お—を 5 ひ—い 9 は—わ

3オ (3オ〜3ウ)

- 1 まつりかよひ給し所く人しれぬ心をくた  
 2 き給人そおほかりける入道宮よりも物の  
 3 きこゑやまたいか、とりなされんと我御た  
 4 めつ、ましけれと忍ひつ、御とふらひつね  
 5 にあり昔かやうにあひおほしあはれを  
 6 もみせたまはましかはとうち思ひ出給ふに<sup>a</sup>  
 7 さもさまく<sup>b</sup>に心をのみつくすへかりける人  
 8 の御ちきりかなとつらく思ひきこゑ給ふ<sup>c</sup>  
 9 三月廿日あまりのほとになんみやこはな

a 「さ」は「に」の左横に小さく書かれた上で、朱墨で減され  
 ている。

b 「さ」は、他の行よりも上に朱墨で書かれており、明らかに  
 後筆であるとわかる。なお、日本大学本ではここに「さ」が  
 入る。

c 「ふ」の下に朱点。

3ウ (3ウ〜4オ)

- 1 れ給ける人にいまとしもしらせ給はすた、  
 2 いとちかくつ<sup>a</sup>かうまつりなれたるかきり  
 3 七八人はかり御ともにていとかすかにいて

- 4 たち給ふさるへき所<sup>く</sup>に<sup>文</sup>はかりうち烈
- 5 たまひしにもあはれとしのはるはかり
- 6 つくい給へるはみところもありぬへかりし
- 7 かとそのおりの心<sup>心</sup>の<sup>心</sup>まきれにはか<sup>く</sup>しく<sup>く</sup>
- 8 も聞をかす成にけり二三日かねて夜<sup>e</sup>
- 9 にかくれて大い殿にわたり給へりあしろ

a 「く」を朱墨でミセケチにして、同じく朱墨で「う」を傍記する。なお、日本大学本では「う」。

b 「と」の下に朱点。

c 「ちの」の字の上に朱墨で一本線を引く。

d 「り」の下に朱点。

e 「し」を朱墨で消して、同じく朱墨で「むし」と傍記する。

【異同】 4 文——御ふみ 7 の——の——く——う

9 し——んし

4 才（4才〜4ウ）

- 1 車のうちやつれたるにて女車のやうにて
- 2 かくろへいり給もいとあはれに夢とのみみゆ
- 3 御かたいとさひしけにうちあれたる心ちして
- 4 わか君の御めのと、も昔<sup>昔</sup>さふらひし人の
- 5 中にまかてちらぬかきりかくわたり給へ
- 6 るをめつらしかり聞えてまうのほりつと

- 7 ひてみたてまつるにつけてもことにももの
- 8 ふかからぬわかき人々<sup>々</sup>さへ世<sup>世</sup>のつねなき
- 9 思ひしられてなみたにくれたりわか君

a 「かく」は日本大学本では補入。

【異同】 8 々——く

4 ウ（4ウ〜5才）

1 はいとうつくしく<sup>a</sup>てへ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>はしりをはしたり

2 久しきほとに忘れぬこそあはれなれ

3 とてひさにすゑ給へる御け色<sup>c</sup>忍ひかたけ

4 なりおと、こなたにわたり給ひてたいめん

5 し給へりつれ<sup>d</sup>く<sup>く</sup>にこもらせ給へるほど何<sup>e</sup>とは

6 むへらぬ昔物語もまいりて聞えさせん

7 と思ふ給ふれと身のやまゐをもきにより

8 大やけにもつかふまつらすゆか<sup>か</sup>くらゐをも

9 返したてまつりて侍るにわたくしさま

a 「く」を朱墨でミセケチにして、同じく朱墨で「う」を傍記。

b 補入された墨の「され」の上から、朱墨で「され」と表記。

c 「色」の後に朱点。

d 「り」の左下に朱点。

e 「る」の上に朱墨で丸をつけ、別墨で「らんイ」と書き、



「イ」の上に朱墨で線を引く。

f 「り」の左に朱墨で「キ」と傍記。

【異同】

1 く—う を—お 4 ん—ナシ

5 る—らん<sup>イ</sup> 6 り—りき

7 ゐ—ひ 8 ふ—う

5才 (5才〜5ウ)

1 にはこしのへてなと物、聞えひかくしかるへき

2 を今は世中は、かるへき身にも侍らねとい

3 ちはやき世のいとおそろしく侍るなり

4 かる御事をみ給ふるにつけて命なかきは

5 いと心うく思ふ給へらる、世の末にも侍る

6 かなあめの下をさかさまになしても思ふ

7 給へよらさりし御ありさまをみたまふれ

8 はよろついとあちきなくなと聞え給て

9 いたくしほたれ給ふとあることもかゝることも

a 「へ」に朱墨で濁点を付す。

b 「、」を別墨でミセケチにし、右に「の」と傍記。

c 「て」の後右<sup>下</sup>と左<sup>下</sup>に朱点。

d 「いと」を朱墨でミセケチにする。

e 「ふ」を朱墨でミセケチにし、右に「ひ」と傍記。

f 「な」の下に朱点。

g 「く」を朱墨でミセケチにして、同じく朱墨で「う」と傍記。

【異同】 1 な—なん 3 く—う 4 て—て

5 いと—ナシ ふ—ひ 6 ふ—ひ

8 な—なん 9 く—う

5ウ (5ウ〜6才)

1 さきの世のむくひにこそ侍るなれはいひ

2 もてゆけはた、身つからのをこたりになん

3 侍るさしてかく官尺を取られすあさはか

4 なることにか、つらひてたに大やけのかし

5 こまりなる人のうつしさまにて世中に

6 ありふるはとかおもきわさ<sup>人</sup>の国にも

7 し侍るなるを遠くはなちつかはすへきさ

8 ためなとも侍るなるはさまことなるつみに

9 あたるへきにこそ侍るなれにこりなき心に

【異同】 3 尺—爵 6 〆—に

6才 (6才〜6ウ)

1 まかせてつれなく過し侍らんもいとは、

2 かりおほくこれよりおほきなるはちに

3 のそまぬさきに世をのかれなんと思ふ

4 給へたちぬるなとこまやかに聞えたまふ

- 5 昔の御物かたり院の御事覚し給はせ
- 6 し御心はへなと聞え出給ひておほんなを
- 7 しの袖もえ引はなち給はぬに君もえ
- 8 心つよくもてなしたまはすわかきみの
- 9 何心なくまきれありきてこれかれに

a 「も」の下に朱墨で補入記号と「も」の表記。

【異同】 6 え——えせ 8 も——も、

6ウ（6ウ〜7オ）

- 1 なれ聞え給ふをいみしと覚したり過<sup>a</sup>
  - 2 侍りにし人をよに思ふ給へ忘る、世なく<sup>b</sup>
  - 3 のみいまにかなしひ侍るをこの御ことに<sup>c</sup>
  - 4 なんもし侍る世ならましかはいかやうに<sup>d</sup>
  - 5 なげき侍らましよくそみしかくてかゝる<sup>e</sup>
  - 6 夢をみす成にけると思ふ給へなくさめ<sup>f</sup>
  - 7 侍るをさなくものし給ふかかくよはひ過ぬる
  - 8 中にと、まり給ひてなつさひ聞えぬ月
  - 9 日やへた、り給はんと思ふ給ふるをなん
- a 「し」を朱墨でミセケチにし、墨で「い」と傍記。
- b 「り」の左下に朱点。
- c 「ふ」を朱墨でミセケチにして「ひ」と傍記。

d 「ひ」を朱墨でミセケチにして「み」と傍記。

e 「な」の前に朱墨で「思ひ」と表記。

f 「ふ」を朱墨でミセケチにして「ひ」と傍記。

【異同】 1 し——い 2 ふ——ひ 3 ひ——み

5 なげき——おもひなげき 6 ふ——ひ

7 を——お 9 は——は

7オ（7オ〜7ウ）

- 1 よろつの事よりもかなしく侍るいにし<sup>a</sup>
- 2 への人もまことにをかしあるにてしも
- 3 かゝることにあたらさりけり猶さるへき
- 4 にて人のみかともかゝるたくひおほく侍<sup>b</sup>
- 5 けりされといひ出るふしありてこそさること
- 6 も侍りけれとさまかうさまに思ふたまへ
- 7 よらんかたなくなんなどおほくの御物語
- 8 聞え給ふ三位中将もまいりあひ給ておほ
- 9 みきなどまいり給に夜ふけぬれば

a 「る」の左下に朱点。

b 「り」の左下に朱点。

【異同】 1 く——う 2 にてしも——にても

4 く——う 6 ふ——ひ



7ウ (7ウ〜8オ)

- 1 とまり給て人々御せん<sup>a</sup>にさふらはせ給て物
- 2 かたりなとせさせ給ふ<sup>b</sup>人よりはこよなく
- 3 忍ひおほす中納言の君い<sup>c</sup>えは<sup>d</sup>多に
- 4 かなしく思へるさまを人しれすあはれと
- 5 おほす人みなしつまりぬるにとりわきて
- 6 かたらひ給ふこれによりとまり給へるなるへし
- 7 明ぬれは夜ふかく出給ふにあり明の月いと
- 8 をかし花の木ともやうく<sup>e</sup>さかりすきて
- 9 わつかなるこかけのいとしろき庭に

a 「御せん」の右に朱墨で「御まへ」、左傍に同じく朱墨で傍線。

b 「ふ」の下に朱点。

c 「し」を朱墨でミセケチにしたうえで「う」と傍記。

d 「木」の右に朱墨で「キ」と傍記。

e 「し」の右に朱墨で「於イ」と傍記。

【異同】 1 せん—前 2 く—う

3 の—ナシ えは多—へはえ

4 く—う 7 く—う 8 し—しう

9 いとしろき—いと(おもイ)しろき

8オ (8オ〜8ウ)

- 1 うすく霧わたりたるそこはかとなくか

2 すみあひて秋のよのあはれにおほく

3 たちまされりすみのかうらんにをし

4 かゝりてとはかりなかつた中納言の君み

5 たてまつりをくらんとにやつまとをしあ

6 けてゐたり又たいめんあらんことこそ思へ

7 はいとかたけれかゝりける世をしらて心

8 やすくもありぬへかりし月比をさしに

9 いそかてへたてけるよなどのたまへは物

a 「ける」を朱墨でミセケチにした上で「し」と傍記。

【異同】 3 を—お 6 ん—む

8 をさしに—を(さしも) 9 ける—し

8ウ (8ウ〜9オ)

1 も聞えずなくわか君の御めのとのさい

2 相の君して宮の御まへより御せうそ

3 聞え給ふ身つからも聞えまほしきをかき

4 くらすみたり心ちためらひ侍るほとに

5 いと夜ふかく出させ給ふなるもさまかはり

6 たる心ちのみし侍るかな心くるしき人の

7 いたななきほとはしはしもやすらはせたま

8 はてと聞え給へれはうちなき給て

9 とりへ山もゑしけふりもまかふやと

a 「く」の下に朱点あり。

b 「ふ」を朱墨でミセケチにして右に同じく朱墨で「へり」と傍記。

c 日本大学本では、「な」の下に点が入っているように見える。

d 「は」の下に朱点あり。

【異同】 2 こ——く 3 ふ——へり

5 いと夜——いと〈夜〉よ 8 れ——〈れ〉  
9 ゑ——え

9 才（9才〜9ウ）

- 1 あまのしほやくうらみにそ行御返りとも
- 2 なくうちすんし給ひてあか月の別はかく<sup>a</sup>
- 3 のみや心つくしなる思ひしり給へる人もあら
- 4 むかしとのたまへはいつとなく別といふもし
- 5 こそうたてく侍る中にもけさは猶たくひ<sup>c</sup>
- 6 あるましく思ひ給へらるゝほとかなとはな声<sup>d</sup>
- 7 にてけにあさからすおもへり聞えまほしき
- 8 ことも返々思ふ給へなからたゝにむすほゝ<sup>e</sup>
- 9 れ侍るほとをゝしはからせ給へいきたなき<sup>f</sup>

a 「く」を朱墨でミセケチにして朱墨で「う」と傍記。

b 「は」の下に朱点。

c 「く」を朱墨でミセケチにしている。

d 「え」の下に朱墨で補入記号を入れ、墨で「させ」と入れる。

e 「ゝ」を朱墨でミセケチにしている。

f 「へ」の下に朱点。

【異同】 2 く——う 4 む——ん

5 く侍る——侍ける 6 く——う  
7 え——えさせ 9 ゝ——ナシ

9 ウ（9ウ〜10才）

- 1 人はみたまへんにつけても中くうき世
- 2 のかれかたく思ふ給へられぬへければ心つよく<sup>b</sup>
- 3 思ひ給へなしていそきまかて侍ると聞え
- 4 給ふいて給ふほとを人々のそきてみたて<sup>c</sup>
- 5 まつる入かたの月いとあかきにいとゝなま
- 6 めかしくきよらにて物をおほひたるさま
- 7 とらおほかみたになきぬへしましていは
- 8 けなくをはせしほとよりみたてまつりそめ
- 9 てし人々なればたとしへなき御ありさま

a b 「く」を朱墨でミセケチにして「う」と傍記。

c 「ふ」の下に朱点。

【異同】 2 く——う く——う 3 ひ——ふ

- 5 いとゝ——いと〈と〉  
 6 く——う ひ——い 8 を——お  
 9 々——く

10オ (10オ〜10ウ)

- 1 をいみしとおもふまことや御かへり<sup>a</sup>  
 2 なき人の別やいとゝへたゝらんけふりと  
 3 成しくもゐならてはとりそへてあはれ  
 4 のみつきせずいて給ぬる名残ゆゝしき  
 5 まてなきあへり殿にをはしたれは我御方  
 6 の人々もまとろまさりけるけ色にて  
 7 所々にむれるてあさましとのみ世を思へ  
 8 るけしきなりさふらひにはしたしくつかう<sup>b</sup>  
 9 まつるかきりは御ともにまいるへき心まふ

a 「ふ」の下に朱点。

b 「く」を朱墨でミセケチにして右に「う」と傍記。

- 【異同】 5 を——お 6 々——く 8 く——う  
 9 ふ——う

10ウ (10ウ〜11オ)

- 1 けしてわたくしの別を、しむほとにや<sup>a</sup>  
 2 人めもなしさらぬ人はとふらひまいるもお

- 3 もきとかめありわつらはしきことまされば  
 4 所せくつとひし馬車のかたもなくさひし  
 5 きに世はうき物成けりとおほしし〈ら〉る大はん  
 6 などもかたへはちりはみてたゝみ所くゝひ<sup>b</sup>  
 7 きかつしたりみるほとたにかゝりまして<sup>c</sup>  
 8 いかにあれゆかんとおほすにしのたいに<sup>d</sup>  
 9 わたり給へはみかうしもまいらてなかめ

a 「ゝ」を朱墨でミセケチにする。

b 「つ」を朱墨でミセケチにして、右に墨で「へ」と傍記。

c 「り」を朱墨でミセケチにして、右に「る」と傍記。

d 「へ」の下に朱墨で補入記号を入れ、「れ」と傍記。

- 【異同】 1 を、——お 5 し〈ら〉る——しらる<sup>リイ</sup>  
 6 へ——え 7 つ——へ り——る  
 9 へ——へれ

11オ (11オ〜11ウ)

- 1 あかし給ければすのこなとにわかきはらはへは  
 2 ところくゝにふしていまぞをきささくとの<sup>a</sup>  
 3 めすかたともをかしくてゐるをみ給にも<sup>b</sup>  
 4 心ほそくとし月へはかゝる人々も多しも<sup>c</sup>  
 5 ありはて、や行ちらんなどさしもあるまし<sup>d</sup>  
 6 きことさへ御めのみとまりけりよへ<sup>e</sup>

- 7 しかくして夜ふけにしかはなんれいのおも  
 8 はすなるさまにや覺しなしつるかくて  
 9 侍るほとたに御めかれすと思ふをかく

a 「く」を朱墨でミセケチにして右に「う」と傍記。

b 「て」の下に朱墨で補入記号を入れ、右に「出」と傍記。

c 「、」に朱墨で濁点を入れる。

d 「り」を朱墨でミセケチにして右に「る」と傍記。また、  
 「り」の下に朱点。

e 「へ」の下に朱墨で「は」と傍記。

f 「の」の下に朱点。

【異同】 1 は—わ 2 を—お

3 を—お くてあ—うていてい

4 く—う 々—く 糸—え

6 り—る へ—へは

11ウ（11ウ〜12オ）

- 1 世をはなる、きはには心くるしきこと  
 2 おのつからおほかりけるをひたやくもりにて  
 3 やはつねなき世に人もなき物と心  
 4 をかれはてんいとをしくてなと聞え給へは  
 5 かゝる世をみるより外に思はずなることは  
 6 何事にかとはかりのたまひていみしと

- 7 覺し入たるさま人よりことなるをこと  
 8 はりそかしち、みこはいとおるかにもとより  
 9 おほしつきにけるにまして世の聞えを

a 「ん」の下に朱墨で補入記号を入れ、「も」と傍記。

b 「く」を朱墨でミセケチにし、右に「う」と傍記。

c 「は」の下に朱点。

d 「り」の下に文字を書きかけ、墨滅したうえから朱墨でも墨  
 滅。

【異同】 2 お—を 4 ん—んも く—う

8 お—を

12オ（12オ〜12ウ）

- 1 わつらはしかりておとつれ聞え給はず御とふ  
 2 らひにたにわたり給はぬを人のみるらんこ  
 3 ともはつかしく中くしられたてまつらてや  
 4 みなましをま、母の北の方などのにわか  
 5 成しさむわひのあた、しさあなゆ、しや思  
 6 ふ人かたくにつけてわかれ給ふ人かなとの  
 7 給ひけるをさるたよりありてもり聞給ふ  
 8 にもいみしく心うければこれよりもたえて  
 9 おとつれ聞えたまはずまたたのもしき

a c 「を」の左下に朱点。

b e 「く」を朱墨でミセケチにして右に「う」と傍記。

d 「あ」の下に墨で補入記号を入れ、「は」と表記。

f 「また」の中間右に朱墨で「又」と傍記。

【異同】

- |          |        |        |
|----------|--------|--------|
| 1 お——を   | 3 く——う | 4 わ——は |
| 5 むわ——いは | あ——あは  | 8 く——う |
| 9 お——を   |        |        |

12ウ (12ウゝ13オ)

- 1 人もなくけにそあはれなる御ありさま
- 2 なる猶世にゆるされかたくてとし月を
- 3 へは岩ほのなかにもむかへたてまつらんだ、
- 4 今は人聞のいとつきなかるへき成おほ
- 5 やけにかしこまりきこゆる人はあきらか
- 6 なる月日のかけをたにみすやすらかに
- 7 身をふるまふこともいとつみおもかなりあ
- 8 やまちなけれとさるへきにこそかゝること
- 9 もあらめと思ふにまして思ふ人くするは

a 日本大学本では、「れ」の下に点が入っているように見える。

b 「く」を朱墨でミセケチにして右に「う」と傍記。

c 「ら」を朱墨でミセケチにする。

d 「めと」の中間に「り」と傍記したあと、「め」の下に朱墨で

補入記号を入れ、「り」の上に朱墨で「れ」と表記。

【異同】

- |          |        |
|----------|--------|
| 1 そ——(そ) | 2 く——う |
| 4 は——(は) | 成——也   |
| 7 か——かん  |        |
| 9 らめ——めれ |        |

13オ (13オゝ13ウ)

- 1 れひなきことなるをひたおもふきにももの
- 2 くるをしき世にてたまさることもあり
- 3 なんと聞こえしらせたまふ日たくるまで御
- 4 とのこもれり帥宮三位中将などをはし
- 5 たりたいめんし給はんとて御なをしなと
- 6 たてまつるくらゐなき人はとてむもんの
- 7 御なをし中くいとなつかしきをき給て
- 8 うちやつれ給へるいとめてたし御ひんかき
- 9 給ふとてきやうたいにより給へるにおもや

a 「ふ」を朱墨でミセケチにし、その上に「む」と表記。

b 「ん」の下に墨で補入記号を入れ、「なと」と表記。

c 「と」の前に朱墨で「ほ」と表記。

【異同】

- |           |        |      |
|-----------|--------|------|
| 1 ひ——い    | お——を   | ふ——む |
| 3 んと——んなと | 4 を——お |      |
| 5 ん——ナシ   |        |      |

13ウ（13ウ～14オ）

- 1 せ給へるかけの我なからいとあてにきよら
- 2 なれはこよなくこそおとろへにけれこの
- 3 かけのやうにやせて侍るかあはれなるわ
- 4 さかなとのたまへは女君涙をひとめうけ
- 5 てみをこそ給へると忍ひかたし
- 6 身はかくてさすらへぬとも君かあたり
- 7 さらぬか、みのかけははなれしときこそ
- 8 たまへは
- 9 別てもかけたにとまる物ならはかゝみを

a 「く」を朱墨でミセケチにして右に「う」と傍記。

b 「に」の下に別筆で「や」と書く。

c 「か」を朱墨でミセケチにする。

【異同】 2 く——う 3 に——に〈や〉 か——ナシ

7 忍——え

14オ（14オ～14ウ）

- 1 みてもなくさめてまはしらかくれに
- 2 ゐかくれてなみたをまきはし給へるさま
- 3 猶こゝらみる中にたくひなかりけりと覚
- 4 ししらるゝ人の御ありさまなりみこは
- 5 あはれなるおほん物かたり聞え給ひて

6 くるゝほとに返り給ひぬ花ちるさとの

7 心ほそけに覺してつねに聞え給ふも

8 ことはりにてかの人もいま「たひみすは

9 つらう（カ）しとや思はんとおほせはそのよは

a 「り」の下に朱点。

b 「ぬ」の下に朱点。

【異同】 1 ら——ら（カ）

14ウ（14ウ～15オ）

- 1 また出給ふ物からいと物うくていたくふかし
- 2 てをはしたれは女御かく数まへ給ひてたち
- 3 よらせ給へることゝよろこひきこゑたまふさ
- 4 まかきつゝけんもうるさしいといみしく
- 5 心ほそき御ありさまたゝこの御かけにかく
- 6 れてすくいたまへるとし月いとゝあれ
- 7 まさらんほとおほしやられてとのゝうち
- 8 いとかすか成月おほろにさしいてゝいけ
- 9 ひろく山こふかきわたり心ほそけにみ

a 「また」の隣に朱墨で「又」と傍記。日本大学本では「また」<sup>x</sup>となつてゐる。

b 「く」を朱墨でミセケチにして「う」と傍記。



c 「ま」の下に朱点。

d 「し」の下に朱点。

【異同】 1 く—う 2 を—お 3 ぬ—え

15オ (15オ〜15ウ)

- 1 ゆるにもすみはなれたらん／岩ほのなかお
- 2 ほしやらるにしをもてにはかうしもわた
- 3 り給はすやとうちくしておほしけるに
- 4 あはれそへたる月かけのなまめかしく
- 5 しめやかなるにうちふるまひ給へるには
- 6 ひにる物なくていと忍ひやかにいり給へ
- 7 れはすこしるさり出てやかて月をみ
- 8 てをはすまたこゝに御物かたりのほとに
- 9 明かたちかく成にけりみしか夜のほと

a 「も」の下に朱点。

b 「る」の下に朱点。

c 「に」を朱墨でミセケチにする。

d g 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

e 「れ」を朱墨でミセケチにする。

f 「また」の右に朱墨で「又」と傍記。

h 「り」の下に朱点。

【異同】 1 ゆ—(ゆ) 2 を—お に—ナシ

3 く—くつ 4 く—う

7 れ—ナシ 8 を—お

9 く—う か—か(の)

15ウ (15ウ〜16オ)

- 1 やかはかりのたいめんも又はぬしもやと思ふ
- 2 こそことなしにて過しつるとしころも
- 3 くやくしきしかた行さきのためしに成
- 4 ぬへき身にて何となく心のとまるよな
- 5 くこそありけれと過にしかたの事ともの
- 6 給ひてとりもしはく／＼なけは世につゝみ
- 7 ていそき出給ふれひの月のいりはつる
- 8 ほとよそへられてあはれ成女君のこ
- 9 き御そにうつりてけにぬるゝかほなれは

a 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

【異同】 1 ぬ—え 2 /—ナシ とし—(年)

3 く—う 7 ひ—い 9 /—ナシ

16オ (16オ〜16ウ)

- 1 月かけのやとれる袖はせはくともとめて
- 2 もみはやあかぬひかりをいみしとおほいた
- 3 るか心くるしければかつはなくさめ聞え給

- 4 ゆきめぐりついにすむへき月かけの
- 5 しはしくもらん空ななかめそおもへははか
- 6 なしやた、／＼しらぬなみたのみこそ心をくら
- 7 す物なれなどのたまひて明くれのほと
- 8 に出給ひぬよろつの事ともした、め
- 9 させ給したしくつかふまつり世になひか

【異同】 4 い——ゐ 8 と——、 9 く——う

16ウ（16ウ〜17ウ）

- 1 ぬかきりの人々との、こととりをこなふへき
- 2 かみしもさためをかせ給ふ御ともにした
- 3 ひ聞ゆるかきりはまたゑり出たまへり
- 4 かの山さとの御すみかのくはえさらすと
- 5 つかひ給ふへき物ともことさらきよらも<sup>a</sup>
- 6 なくことそきて又さるへきふみとも文集
- 7 などいりたる箱さてはきんひとつそもたせ
- 8 給ふ所せき御てうとはなやかなる御よそ
- 9 ひなとさらにくしたまはすあやしの山

a 「きよら」を朱墨でミセケチにし、「よそひ」と傍記。なお、

『源氏物語大成』<sup>五</sup>によると、「きよら」という本文はない。

b 「は」を朱墨でミセケチにし、「も」と傍記。

【異同】 1 を——お 3 ゑ——え 4 ぐ——く  
5 きよら——よそひ

17オ（17ウ〜18オ）

- 1 かつめきてもてなし給ふさふらふ人く
- 2 よりはしめよろつのことみなにしのたいに
- 3 聞えわたし給りやうし給ふ御庄みまきよ<sup>a</sup>
- 4 りはしめてさるへき所々のくゑんなどみな<sup>b</sup>
- 5 たてまつりをき給ふそれより外の御くら
- 6 まちおさめとのなといふことまで少納言<sup>c</sup>
- 7 はかくしき物にみをき給へればした
- 8 しきけいしともくしてしろしめす
- 9 へきさまもものたまひあつくわか<sup>d</sup>

a 「し」に朱墨で濁点を付す。

b 「くゑ」の右に「け」と傍記。

c 「は」の前に朱墨で「を」と表記。

d 「く」の下に朱点。

【異同】 6 少納言——少納言を

17ウ（18オ〜18ウ）

- 1 御方の中つかさ中將やうの人々つれなき御<sup>a</sup>
- 2 もてなしなからみたてまつるほとこそ

- 3 なくきめつれ何ことにつけてかとおもへ
- 4 とも命ありてこの世に又帰るやうもあ
- 5 らんをまちつけんと思はん人はこなたに
- 6 さふらへとのたまひてかみしもみなまう
- 7 のほらせ給ふわか君の御めのとたち花ちる
- 8 さとなどにもをかしきさまのはさる物にて
- 9 まめくしきすちにおほしよらぬことなし

a 「将」の下に朱墨で補入記号、右に「なと」と傍記。

b 「も」の下に朱点。

c 「ふ」の下に朱点。

d 「の」を朱墨でミセケチにする。

e 「て」の下に朱点。

f 「し」の下に朱点。

【異同】 1 つ——つゆ 中将——中将など 々——く

5 ん——む 8 の——ナシ

18才 (18ウ〜19オ)

- 1 内侍のかみの御もとにわりなくして聞え給
- 2 とはせ給はぬもことはりに思ふ給へなから今は
- 3 とよを思ひはつるほどのうさもつらさもた
- 4 くひなきことにこそ侍りけれ
- 5 あふせなき涙の川にしつみしやなかる、

- 6 みをのはしめなりけんと思ふ給ふるのみ
- 7 なんつみのかれかたく侍りけるみちのほ
- 8 ともあやうければこまかには聞えたまはず
- 9 女いといみしく覚え給ひて忍ひ給へと御

a 「給」の下に朱点。

b 「く」を朱墨でミセケチにし、朱墨で「う」と傍記。

c 「る」の下に朱点。

【異同】 3 つ——つゆ 6 を——お 7 く——う

18ウ (19オ〜19ウ)

- 1 袖よりあまるもところせうなん
  - 2 涙河うかふみなはもきえぬへしなかれて
  - 3 のちのせをもまたすてなくくみたれか
  - 4 き給へる御ていとをかしけなりいまたひ
  - 5 たいめんなくてやとおほすは猶くちをし
  - 6 けれと覚し返ししてうしとおほしなす
  - 7 ゆかりおほくておほろけならず忍ひ給へは
  - 8 いとあなちにもきこゑたまはず成ぬあす
  - 9 とてのくれには院の御はかおかみたてまつり
- a 「て」の後に朱点。
- 【異同】 4 を——お 5 ん——ナシ を——お

7 お——おお 8 ぬ——え 9 お——を

19オ（19ウ〜20オ）

- 1 給ふとて北山へまふて給あか月かけて月い
- 2 つるころなれはまつ入道宮にまうて給ふち
- 3 かきみすのまへにおましまいりて御みつから
- 4 聞えさせたまふ東宮の御ことをいみしく
- 5 うしろめたき物に思ひきこゑ給ふかたみに
- 6 心ふかきとちの御物かたりはたよろつあ
- 7 はれまさりけんかしなつかしくめてたき御
- 8 けはひのむかしにかはらぬにつらかりし御心
- 9 はへもかすめ聞えまほしけれといまさらに

a 「し」の下に朱点。

b 「え」の下に朱墨で補入記号、右に「させ」と傍記。

【異同】 1 ふ——う 4 東——春 5 ぬ——え

7 く——う 9 へ——え え——えさせ

19ウ（20オ〜20ウ）

- 1 うたてとおほさるへしわか御心にも中く
- 2 いまひときはみたれまさりぬへければねん
- 3 し返してた、かく思ひかけぬつみにあたり
- 4 侍るも思ふ給へあはすることの「ふしになん

5 空もおそろしう侍るをしけなき身は

6 なきになしても宮の御世たにことなくお

7 はしまさはとのみ聞え給ふそことほりなるや

8 宮もみな覺ししらる、ことにしあれば御

9 心のみうこきて聞えやり給はず大将よろ

a c 「も」の下に朱点。

b 「う」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

d 「や」の下に朱点。

【異同】 5 を——お

20オ（20ウ〜21オ）

- 1 つのことかきあつめおほしつ、けてなき給へ
- 2 るけしきいとつきせすなまめきたり御
- 3 山にまいり侍るを御ことつてやと聞え給ふに
- 4 とみに物もきこゑ給はすわりなくためらい
- 5 給ふ御けしきなり
- 6 〳〵みしはなくあるはかなしき世のはてをそ
- 7 むきしかひもなく〳〵そふるいみしき御心
- 8 まどひともに覺しあつむる御こと、も、
- 9 えそつ、けさせ給はぬ

a 「り」の下に朱点。

b 「を」の下に朱点。

c 「に」の下に朱点。

d 「御」を朱墨でミセケチにする。

【異同】 4 も——も へ——え い——ひ

8 御——ナシ 9 え——え

20ウ (21オ→21ウ)

1 わかれしにかなしきこととはつきにしを

2 またその世のうさはまさされる月まち

3 いて、出給ふ御ともにた、五六人はかりしも人

4 もむつまじきかきりして御馬にてそをは

5 するさらなることなれとありし世の御あり

6 きにことなりみないとかなしく思ふ中にかの

7 みそきの日かりの御すいしんにてつかう

8 まつりし右近せうの蔵人うへきかうふり

9 もほと過つるをつるにみふたけつられ

a 「また」の右に朱墨で「又」と傍記。

b 「る」の下に朱点。

c 「り」の下に朱点。

d 「く」を朱墨でミセケチにし、右に朱墨で「う」と傍記。

【異同】 4 を——お 6 く——う 8 せ——そ

21オ (21ウ→22オ)

1 つかさもとられてはしたなけれは御ともにま

2 いるうち成かものしものみやしろをかれと

3 みわたすほとふと思ひいてられておりて

4 御むまのくちをとる

5 引つれてあふひかさししそのかみを思へは

6 つらしかものみつかきといふをけにいかに

7 思ふらん人よりけに花やか成し物をとおほ

8 すも心くるし君も御むまよりをり給て

9 みやしろのかたおかみ給神にまかり申給ふ

【異同】 1 な——(な) 5 し——、 8 を——お

9 お——を

21ウ (22オ→22ウ)

1 うき世をはいまそわかる、と、まらん名を

2 はた、すの神にまかせてとのたまふ物

3 めてするわかき人にて身にしてみてあはれに

4 めてたしとみたてまつる御山にまうて

5 給ひておはしましし御ありさまた、めの

6 まへのやうにおほしいてらるかきりなき

7 にても世になく成ぬる人そいはんかたなく

8 くちをしきわさなりけるよろつの事を

9 なくく申給ひてもそのことはりをあらはに

a 「ふ」の下に朱墨で補入記号、右に「さま」と傍記。

b 「る」の下に朱点。

【異同】 2 ふ——ふさま 8 を——お

22オ（22ウ）23オ

1 えうけ給はりたまはねはさはかり覺しのたま

2 はせしさまぐの御ゆいこんはいつちかきえうせ

3 にけんといふかひなし御はかは道の草しけ

4 く成てわけ入給ふほといと、露けき

5 月も雲かくれてもりのこたちこふかく

6 心すこし帰りいてんかたもなき心ちして

7 おかみ給ふにありし御面かけさやかにみえ給

8 へるそ、ろさむきほとなり

9 なきかけやいか、みるらんよそへつ、なか

【異同】 7 お——を 9 いか、——（いか、）

22ウ（23オ）24オ

1 みる月も雲かくれぬる明はつるほとに返り

2 給ひて東宮にも御せうそこ聞え給ふ王命

3 婦を御かはりとてさふらはせ給へはそのつほねに

4 とてけふなん都はなれ侍る又まいり侍らす

5 成ぬるなんあまたのうれへにまさりて思ふ

6 給へられ侍るよろつをはかりてけいし給へ

7 いつかまた春のみやこの花をみん時うし

8 なへる山かつにしてさくらのちり過たる枝に

9 つけ給へりかくなんと御らんせさすればおさ

a 「て」の右に墨で「イ」と傍記。

b 「り」の下に朱点。

c 「は」の下に朱点。

【異同】 1 明——あす<sup>け</sup> 4 都——宮こ

6 て——（てイ）

23オ（24ウ）24ウ

1 なき御心ちにもまめたちてをはします<sup>a</sup>

2 御返りいか、物し侍らんとけいすれはしはし<sup>b</sup>

3 みぬたに恋しき物をとをくはましていかにと

4 いへかしとのたまはす物はかなの御返りやと

5 あはれにみたてまつるあちきなきことに御心

6 をくたき給ひし昔の事おりくの御ありさま

7 思ひつ、けらるゝにも物思ひなくて我も人もす

8 くひ給ふへかりける世を心と覺しなけきけ

9 るをくやくしく我心ひとつにか、らんことの



a c 「す」の下に朱点。

b 「は」の下に朱点。

d 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

【異同】 1 を—お 8 ひ—い ふ—ひつ

9 く—う

23ウ (24ウ〜25オ)

- 1 やうにそ覚ゆる御返りはさらに聞えさせやり
- 2 侍らすおまへにはけいし侍りぬ心ほそけに
- 3 覚しめしたる御け色もいみしく<sup>a</sup>なんとそこ
- 4 はかとなく心のみたれけるなるへし
- 5 さきてとくちるはうけれとゆく春は花
- 6 のみやこをたちかへりみよ\時し<sup>b</sup>あらはと聞え
- 7 て名残もあはれる物かたりをしつ、ひと宮
- 8 のうち忍ひてなきあへりひと<sup>c</sup>めもみたてま
- 9 つる人はかく思しくつをれぬる御有さま

a 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

b 「時」の横の合点の下に朱墨で「未勘」と表記。なお、擦れていて不鮮明ではあるが、日本大学本にも似た書き入れがある。

c 「つ」の下に朱墨で補入記号、右に「れ」と傍記。

【異同】 3 く—う 6 みやこ—宮こ

9 つ—つれ

24オ (25オ〜25ウ)

- 1 をなけきを<sup>a</sup>しみきこ<sup>b</sup>ぬ人なしましてつねに
  - 2 まいりなれたりしはしりおよひ給ふましき\おさめ
  - 3 みかはやうと<sup>a</sup>まてありかたき御かへりみのした
  - 4 成つるを<sup>b</sup>しはしにてもみたてまつらぬほとやへん
  - 5 と思ひなけきけり大かたの世の人もたれかは
  - 6 よろしく思ひ聞えん七に成給ひしこのかた
  - 7 みかとの御まへによるひるさふらひて<sup>b</sup>そうし
  - 8 給ふことのならぬはなかりしかはこの御いたはりに
  - 9 か、らぬ人なく御とくをよろこはぬやは有し
- a 「と」に朱墨で濁点を付す。
- b 「く」を朱墨でミセケチにし、下に朱墨で補入記号を入れ、右に墨で「給て」と傍記。

【異同】 1 を—お ぬ—え 2 お—を

7 て—給て

24ウ (25ウ〜26オ)

- 1 やんことなきかむたちめ弁官などのな<sup>a</sup>か
- 2 にもおほかりそれよりしもはかすしらす<sup>b</sup>おもひ

- 3 しらぬにはあらねとさしあたりていちはやき
- 4 世を思ひは、かりてまいりよるもなし世ゆい<sup>a</sup>
- 5 すりてをしみきこゑしたには大やけを
- 6 そしりうらみたてまつれと身をすて、と
- 7 ふうひまいらんにも何のかひかはと思ふにや
- 8 かゝるをりは人わろくうらめしき人おほく世
- 9 中はあちなき物かなとのみよろつにつけ

a 「い」を朱墨でミセケチにする。

【異同】

- |   |   |   |    |   |   |   |   |
|---|---|---|----|---|---|---|---|
| 1 | む | — | ん  | 2 | す | — | ぬ |
| 4 | い | — | ナシ | 5 | を | — | お |
| 7 | ん | — | む  | 8 | を | — | お |
|   |   |   |    |   |   |   | ゑ |
|   |   |   |    |   |   |   | え |

25才（26才〜26ウ）

- 1 ておほすその日は女君に御物語のとかにき
- 2 こえくらし給てれいの夜ふかく出給ふかりの
- 3 御そなとたひの御よそひいたくやつし給ひて
- 4 月いてにけりな猶すこしいて、みたに
- 5 をくり給へかしいかに聞ゆへき事おほくつ
- 6 もりにけりと覚えんとすらんひとひふつか
- 7 たまさかにへたつるおりたにあやしきいふせ
- 8 き心ちする物をとてみすまきあけて
- 9 はしにいさなひ聞え給へは女君なきしつみ

25ウ（26ウ〜27才）

- 1 給へるためらひてゐさり出給へる月かけにいみ
- 2 しくを<sup>a</sup>かしけにてゐ給へり我身かくては
- 3 かなき世をわかれないかなるさまにさすらへ
- 4 給はんとうしろめたくかなしけれと覚しいり
- 5 たるにいと、しかるへければ
- 6 いける世のわかれをしらてちきりつ、命を
- 7 人にかきりける哉はかなしなどあさはかに
- 8 きこゑなしたまへは
- 9 をしからぬ命にかへてめのまへのわかれを

a 「く」を朱墨でミセケチにして、「う」と傍記。

b 「に」を朱墨でミセケチにして、「か」と傍記。

【異同】

- |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | く | — | う | 5 | に | — | か |
| 8 | ゑ | — | え | 9 | を | — | お |

26才（27才〜27ウ）

- 1 しはしと、めてしかなげにさそおほさるら
- 2 む<sup>b</sup>といとみすてかたけれと明はてなははした
- 3 なかるへきによりいそきいて給ひぬ道すから
- 4 おもかけにつとそひてむねもふたかりな
- 5 から御舟にのり給ぬ日ななき比なれはをひ

- 6 かせさへそひてまたさるの時はかりにかの
- 7 浦につき給ぬかりそめの道にてもかゝる
- 8 たひをならひたまはぬ心ちに心ほそさも
- 9 をかしさもめつらかなり<sup>㊦</sup>おほえとのといひ

【異同】

- 2 む——ん
- 5 ひ——い
- 9 を——お
- ㊦——ナシ

26ウ (27ウ〜28オ)

- 1 ける所はいたくあれて松はかりそしるし成ける<sup>㊦a</sup>
- 2 からくに、名をのこしける人よりも行
- 3 ゑしられぬ家ゐをやせんなきさによる波
- 4 のかつ帰るをみ給ひて／うらやましくもとうち
- 5 すんし給へるさまさる世のふることなれとめ
- 6 つらしく聞なされかなしとのみ御ともの人く
- 7 おもへりうちかへりみ給へるにこしかたの山
- 8 はかすみはるかにてまことに／三千里の外
- 9 の心ちするに／かひのしつくもたゑかたし

a 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

【異同】

- 1 く——う
- 5 さ——㊦さ
- 9 ゑ——へ

27オ (28オ〜28ウ)

- 1 ふる郷をみねのかすみはへたつれとなか
- 2 むる空はおなしくもゐるかつらからぬ物なく
- 3 なんおはすへき所はゆきひらの中納言の<sup>㊦a</sup>
- 4 〳もしほたれつゝわひける家ゐちかきわた
- 5 り成けり海つらはやゝ入てあはれにすこけ<sup>a</sup>
- 6 なる山中成かきのさまよりはしめてめつら
- 7 かにみ給ふかややともあしふけるらうめ
- 8 くやなどをかしくしつらひなしたりところに
- 9 つけたる御すまひやうかはりてかゝらぬ

a 「に」の下に朱墨で補入記号を入れ、「心」と傍記。

【異同】

- 3 の——(の)
- 5 に——に心
- 8 を——お
- 9 ひ——ゐ
- らぬ——る<sup>らぬ</sup>

27ウ (28ウ〜29オ)

- 1 をりならは<sup>a</sup>おかしくも<sup>b</sup>ありなましと昔の
- 2 御心のすさ<sup>b</sup>ひ<sup>c</sup>覚しいつるちかき所々の御庄の
- 3 つかさめしてさるへきことゝもなとよしきよ
- 4 の朝臣したしきけいしにて仰をこなふも
- 5 あはれなり時のまにいとみところあり
- 6 てしなさせ給ふ水ふかくやり<sup>d</sup>なしうへ木
- 7 ともなとしていまはとしつまり給こゝち
- 8 うつゝならず<sup>e</sup>に<sup>e</sup>のかみもしたしきとの人

9 なれは忍ひて心よせつかうまつるかゝるたひ

a 「ら」の下に墨で補入記号を入れ、「すは」と傍記した上で、

「は」のみを朱墨で消す。

b d 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

c 「る」を朱墨でミセケチにする。

【異同】 1 を—お はお—すはを く—う

2 ひ—み る—ナシ タ—く

4 ふ—う 6 く—う

28オ（29オ〜29ウ）

1 所ともなく人さはかしけれともはかしくしく<sup>a</sup>

2 物をもの給ひあはすへき人しなればし

3 らぬくにの心ちしていとむもれいたくいか

4 てとし月をすくさましと覺しやらる

5 やうくことしつまり行になか雨の比に成て

6 京の事ともおほしやらるゝに恋しき人

7 おほく女君の覺したりしさま東宮の御こと

8 わか君の何心もなくまきれ給ひしなと

9 をはしめこゝかしこ思ひやり聞え給ふ京へ

a 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

【異同】 1 く—う

28ウ（29ウ〜30オ）

1 人いたしたて給二条院へたてまつれ給ふと<sup>a</sup>

2 入道の宮とはかきもやり給はすくらされたま<sup>b</sup>

3 へり宮には

4 まつしまのあまのとまやもいかならん

5 すまのうら人しほたるゝころいつと侍らぬ中

6 にもきしかた行さきかきくらしみきはまさ

7 りてなん内侍のかみの御もとにれいの中納言

8 の君のわたくしことのやうにてなかなるに

9 つれくと過にしかたの思ふ給へ出らるゝにつけて<sup>d</sup>

a 「れ」を朱墨でミセケチにし、「り」と傍記。

b 「宮」の下に朱墨で補入記号を入れ、「の」と表記。

c 「ふ」を朱墨でミセケチにする。

d 「て」の下に朱墨で「も」と入れる。

【異同】 1 れ—り 2 宮—宮の

8 なか—中 9 て—ても

29オ（30ウ〜31オ）

1 ころすまのうらのみるめのゆかしきを<sup>a</sup>

2 しほやくあまやいか、思はんさまくかきつく

3 し給ふことのは思ひやるへし大殿にも宰相の

- 4 めのともつかふまつるへきことなどかきつか
- 5 はす京にはこの御ふみ所々にみ給ひつ、御心
- 6 みたれ給ふ人々のみおほかり二条院の君は
- 7 そのまゝにおきもあかり給はずつきせぬさま
- 8 に覚しこかるればさふらふ人々もこしらへ
- 9 わひつ、心ほそく思ひあへりもてならし

a 「の」を朱墨でミセケチにする。

- 【異同】
- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | の | も | 2 | ほ | を | 4 | ふ | う |
| 6 | 々 | く | 8 | 々 | く |   |   |   |

29ウ (31オ↪31ウ)

- 1 給ひし御ことぬきすて給へる御そのにほひ
- 2 などにつけてもいまはと世にならん人の
- 3 やうにのみ覚したれはかつはゆ、しく少
- 4 納言はそうつに御いのりのことなときこゆふた
- 5 かたに御修法などせさせ給ふかつはかくお
- 6 ほしなげく御心しつめ給ひて思ひなき世に
- 7 あらせたてまつり給へと心くるしきまゝに
- 8 いのり申給たひの御とのあものなとてうし
- 9 てたてまつり給ふかとのりの御なをしさしぬ

a 「御」の下に朱墨で補入記号を入れ、「御てうともひきなら

し給ひし御」と書かれている。

- b 「く」の下に朱墨で補入記号を入れ、「て」と傍記。
  - c 「御」を朱墨でミセケチにする。
- 【異同】
- |   |   |               |
|---|---|---------------|
| 1 | 御 | 御てうともひきならし給し御 |
| 3 | く | くて            |
| 4 | に | ほ             |
| 8 | 御 | ナシ            |

30オ (31ウ↪32オ)

- 1 きさまかはりたる心ちするもいみしきに
- 2 さらぬか、みとの給ひし面かけのけに身に
- 3 そひ給へるもかひなし出入給ひしかたよりの
- 4 給し、まきはしらなどをみたまふにもむねの
- 5 みふたかりて物をとかく思ひめぐらし世に
- 6 しほしみぬるよはひの人たにありまして
- 7 なれむつひ聞えち、母にも成ておほしたて
- 8 ならばし給へれば恋しく思ひ聞え給へること
- 9 はり成ひたすら世になく成なんはいはん方

a 「た」の下に朱点。ただし、日本大学本には見えなかった。

b d 「く」を朱墨でミセケチにし、「う」と傍記。

c 「ほ」の右に朱墨で「を」と傍記。

- 【異同】
- |   |       |            |   |
|---|-------|------------|---|
| 4 | を     | く          | う |
| 7 | おほしたて | おほしたておほしたず |   |

8 く——う

30ウ（32オ→32ウ）

- 1 なくてやうく<sup>レ</sup>忘れ草<sup>ヲ</sup>もをひ<sup>レ</sup>やすらんきく
- 2 ほとはちかけれといつまととかきりある御別
- 3 にもあらておほすにつきせずなん入道の
- 4 宮にも東宮の御ことによりおほしなけ
- 5 くさまいとさらなり御すくせのほとおほ
- 6 すにはいか、あさくおほされんとし比は
- 7 た、物、聞えなどのつ、ましさにすこしな
- 8 さけあるけ色みせはそれにつけて人のと
- 9 かめいつることもこそとのみひとへに覚し

a 「、」の上から朱墨で「の」と表記。

【異同】 1 をひ——おい

3 おほすに——おほすにおほすに 4 東——春

6 く——くは

### 三、書き入れと日本大学本との相違

本帖の書き入れは、合点、朱点、朱墨による書き入れの三つに分けられる。この三つの観点から、本帖の前半を整理したい。

本帖に書き入れられている合点は、第一五丁ウラ二行目「ことなしにて」、同丁九行目「ぬる、かほ」についているもの以外は、

全て日本大学本と一致する。そして、日本大学本にはない二箇所  
の合点も含めて、合点が付されている箇所は、河海抄、あるいは  
称名院（三条西公条）説の注と一致する。<sup>〔六〕</sup> また、二三丁ウラの  
「時しあらは」の合点には、学習院本、日本大学本ともに「未  
勘」と傍記されているが、この箇所については、『花鳥余情』が  
「哥の詞有へしいまた見いたし侍らす」、『弄花抄』が「引哥未見  
心は明也」、称名院説が「時あらはやかてかへり給への心也」と  
いう注を付している。

次に、朱点についてだが、学習院本の朱点の位置と、日本大学  
本の朱点の位置は、五〇か所が一致する。<sup>〔八〕</sup> 日本大学本は、白黒の  
影印であるため、朱点の見逃しがある可能性も否定できないが、  
一致する五〇か所以外の朱点は、以下の通りである。

(一) 学習院本にあつて日本大学本にない箇所

一五丁オモテ二行目、三〇丁オモテ三行目

(二) 日本大学本にあつて学習院本にない箇所

八丁ウラ六行目、一二丁ウラ一行目

この四か所については書写時の写し忘れや誤写が考えられる。  
そもそも、朱点は、句読点を打つ位置と一致する可能性が高い。  
ただし、右掲の異同のある四か所のうち、一二丁ウラ一行目は、  
「人もなくけにそあはれ・なる御ありさま」、三〇丁オモテ三行目  
は、「出入給ひしかた・よりぬ給し」となっており、句読点の位  
置とずれているといえる。一致する五〇か所の中にも、句読点の  
位置とは明らかにずれるものもあるが、異同のある四か所のうち



の二か所が句読点に一致しないことは、誤写の可能性が高いといえよう。

次に、朱墨による書き入れだが、これは、学習院本を書いた後に、他の本を用いて校合した痕跡であると考えられる。学習院本には朱墨による書き入れが多いが、このうち、八一か所が日本大学本の本文と一致する。校合に用いたほかの本が、日本大学本そのものであるとは考えにくい。少なくとも、日本大学本に近い本文を用いていたことは確実である。

最後に、本帖の前半のみの翻刻と日本大学所蔵三条西家本との比較の結果を簡単にまとめる。

- ① 合点は、『河海抄』、称名院（三条西公条）説と一致する箇所が大半を占めること。
- ② 朱点、朱墨による書き入れが日本大学本と一致する箇所が極めて多いことから、日本大学本に近い本を基に校合されたといえること。

注

〔一〕 佐々木孝浩（『日本古典書誌学論』笠間書院、二〇一六年）は以下のように述べる。

薄い紙でも一度折って折目を下に揃えてから重ね用いれば綴葉装を製作することができる。このやや特殊な装訂も様々な名で呼ばれているが、ここでは「折紙綴葉装」と「複式列帖装」の名称を紹介しておきたい。

〔二〕 佐々木孝浩（注一に同じ）は、「折紙綴葉装」について、以下のように述べる。

安価な紙で高級な装訂が製作できることに加えて、重い斐紙で製作される綴葉装とは異なり、軽量な本ができる点も特徴である。その使用率は綴葉装全体では極めて少数だが、十五、六世紀頃に全国を旅して連歌を指導し、その実作に必要となる古典文学を講じていた連歌師達の用いた書物に見かけることが多いのは、軽量でありながら見栄えも良かったことが理由であろう。

〔三〕 『日本大学蔵 源氏物語 第三卷 三条西家証本 三』平文社、一九九五年

〔四〕 松尾檀「学習院大学国語国文学研究室蔵三条西家旧蔵本攷（一）…伊勢物語其一」『学習院大学国語国文学会誌』第九号、一九六六年

〔五〕 池田亀鑑『源氏物語大成』第二卷、中央公論社、一九八四年

〔六〕 なお、『岷江入楚』において、称名院（三条西公条）説は、「秘」と表記される。

〔七〕 中田武司編『源氏物語古注集成第一二巻 岷江入楚第二巻』桜楓社、一九八四年一月を参照。

〔八〕 学習院大学本と日本大学本の朱点の位置が一致する箇所には波線を引いてある。

\*本稿は、JSPS科研費17K13392の助成を受けたものである。



（むとう ながこ） 学習院大学国際研究教育機構PD共同研究員

# Commentary on and a Reprint of a Volume of “Suma” , the 12th Chapter of Genji Monogatari, Held by Gakushuin University and Previously Owned by the Sanjonishi Family:

A Comparison with the “Suma” Held by Nihon University and Also  
Previously Owned by the Sanjonishi Family (First Half)

Nagako Muto

## Abstract

Gakushuin University holds a volume of the “Suma” chapter from the Tale of Genji (*Genji monogatari*) which was copied in the early Edo period, and whose binding is the *origami tetsuyousou*. It must be noted that the volume was previously owned by the Sanjonishi family, since this type of binding was generally seen in the libraries of *renga* poets. Moreover, the volume is precious because of its especially small size (13.6 cm long and 9.8 cm wide) and the temporary binding thread. It is also significant that the relationship between the Sanjonishi family and the Koga family can be inferred from a note by “the maid of the Nyudo Koga” (入道久我殿女房) on the end paper of the back cover. Therefore, this study includes a reprint of the text and the notes in this volume and evaluates it by comparison with the volume of the same chapter held by Nihon University and which also belonged to the Sanjonishi family.